

主 題：キリストの弟子として歩んでいますか？

聖書箇所：ルカの福音書 14章25－33節

テーマ：イエス・キリストの弟子として歩むとはどういうことなのか

本当なら、今私たちが時間をかけて学んでいるコロナ人への手紙に戻るつもりでしたが、今回お休みをいただいている間いくつかの本を読んで、改めて、あることを考えていました。それで、きょうは皆さんとともにルカ14：25－33を見ようと思います。そしてこの箇所から、一つの問いを一緒に考えてみましょう。それは、「キリストの弟子として歩むとはどういうことなのか」ということです。別のことばで言い換えるなら、「キリストによって本当に救われているのなら、本当に救われている人はどのような歩みをするのか」ということです。自分のこととして考えてみてください。だれかがあなたのところにやって来て「あなたは今、キリストの弟子として歩んでいますか？そもそもキリストの弟子として歩むとはどういうことですか？」と尋ねたなら、どのように答えるでしょう？

多くの方はこれまでも聞かれたことがあると思いますが、キリストに従う信仰者の歩みはしばしばレースやマラソンにたとえられることもあります。例えばあのパウロも、自身の歩みをこう口にしていました。Ⅱテモテ4：7に「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と。またヘブルの著者もこのように述べていました。ヘブル12：1「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐を持って走り続けようではありませんか。」と。ですからキリストに従うものはだれであろうと、信仰のレースを最後まで走りきるということを目指して歩んでいるのです。その途中で私たちもあるのです。でも当たり前のことですが、私たちが何らかのレースを思い浮かべるとき、どんなレースにも必ずスタートがあり、ゴールがあります。決められたスタートから出発して、決められたゴールにたどり着くということが、どんなレースにも当てはまる当然の目標となるわけです。もしだれかがスタートする位置をそもそもまちがえていたとすれば、どんなに頑張ろうとも永遠に正しいゴールにたどり着くことはありません。どれだけレースの途中で待ち受けているさまざまな困難を乗り越えたとしても、最初のスタートがそもそも違っていれば、そのすべては意味をなさないのです。また何よりも、ゴールだと思ってたどり着いたその場所が、もしゴールでなかったとすれば、これほど悲劇的なものはありません。どんなレースにおいても、正しいスタートから出発して、正しいゴールまで走りきるということが欠かすことのできない大切なものになるのです。

そしてこれは、信仰のレースにおいても、キリストの弟子としての歩みにおいても同じことが言えるのです。これから私たちは一緒にルカ14：25－33を見ていきます。この箇所自体は、もう多くの人たちが何度も触れて知っている箇所の一つかもしれません。でも同時に、この箇所ほど私たちに厳しく語っている箇所はないかもしれません。あまりにもこの箇所の内容が厳しすぎるがゆえに、ある人はこの箇所がまるで存在していないかのように無視して、自分勝手にスタート地点を決めていたりします。またある人はこれ以外の何か容易で簡単で、自分自身が納得できるそんな別のスタート地点がないかを探し回っていたりもします。でも私たちが覚えなくてはならないのは、これから見ていくこのことばは、ほかのだれでもない私たちが愛しているイエス・キリストご本人が口にされたものだということです。そしてそのイエス様が明白に、キリストの弟子として歩むスタート地点がどこにあるのかを教えてくださいました。ですから皆さん、自分自身のこととして考えてみましょう。イエス様のことばに耳を傾けてみましょう。キリストの弟子として歩むことがいったい何を意味しているのか、そして何よりも、自分がそのように歩んでいるのかを。このみことばが、皆さんそれぞれの信仰の吟味になるだ

けではなく、より揺るがぬ確信を持って歩む励ましになることを心から祈っています。では、まず25節から見てください。

### ルカ14：25-33

「:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていましたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」

#### ●場面：イエス様とともに歩いていた“群衆たち” 25節

さて、私たちはこれから、キリストの弟子として歩むことが実際にどういうことなのかを改めて考えていきますが、その前に少し、場面・背景を押さえておきましょう。イエス様はいったいどんな人たちに向かって話しかけられていたのが25節に描かれていました。25節「さて、大ぜいの群衆が、イエスと一緒に歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。」「大ぜいの群衆が、イエスと一緒に歩いていた」とありました。思い浮かべてみてください。多くの人たちがイエス様に続いて一緒に歩いていたのです。この時イエス様は、もうしばらくすればご自分が十字架にかかって死ぬこと、苦しむことをご存じでした。すぐそこに苦しみが迫っていることを知っている中であって、エルサレムに向かって旅をしておられたのです。そしてその道中であって多くの人たちがついて来ました。男性も女性も、子どもや老人に至るまでいろんな人たちがいたことでしょう。ここで皆さんに覚えていてほしいのは、そういった群衆の中には、イエス様がほかの人とは異なる特別な存在だということに気づいていた者たちも数多くいた、ということです。どういうことかということ、ちょっと戻ってルカ9：18-19に、イエス様と弟子たちのやりとりがこう記されてきました。「:18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」:19 彼らは、答えて言った。『バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。』」ましがいなく群衆の一部は、イエス様の不思議な知恵や力に気づいていました。彼らはそれらを目の当たりにして、さまざまな憶測を立てていたのです。群衆の中には、権威ある者のように教えているイエス様の教えを何度も何度も耳にして驚いていた者もいたでしょう。もしかしたら五千人以上の人々を五つのパンと二匹の魚で満たされたその奇跡を自分の目で目撃した者たちもいたでしょうし、盲目の人の目を癒されたり、ひどい病を患った人を癒されたり、悪霊が追い出されたりと、信じられないことが繰り返し、繰り返し人々の目の前で起こっていたのです。当然、彼らは圧倒されたでしょう。それに興味をひかれたのです。イエス様の教えに関心を覚えていた者たちもいたでしょう。だから、彼らは群衆に加わったのです。家に帰るのではなく、群衆に加わりました。でも残念ながら、彼らのすべてがイエス様の本当の弟子として歩んでいたわけではありませんでした。彼らのうちにはイエス様を真に信じて従っていたのではなくて、ただの興味本位や、自分自身が望んでいるものを手にするために群衆の一部としてついて行っただけの者たちがいたのです。彼らは興味がありました。彼らのうちには、「自分はイエス様の弟子だ」と信じて疑わなかった者たちもいたでしょう。でもその中には、本当の意味でイエス様に従うということが何なの

かを知らない者たちが数多くいました。だから、そのような人々の心のうちをご存じであったイエス様は振り返って彼らに向かって、本当の弟子はいったい何なのかを教え始められたのです。キリストの本当の弟子として従っていくということと、単に関心を抱いて取り巻きの一部としてついて行くことには完全な違いがあるのだと、はっきりと教えられました。そしてその基準は、昔も今も決して変わっていません。イエス様は、今を生きている私たちひとりひとりに対してもイエス・キリストの弟子として信じ従っていくことを求めておられるのです。

では、具体的にキリストの弟子として歩むということがどういうことなのか、大きく三つのポイントから考えてみましょう。

## ○キリストの弟子として歩むこと：三つのポイント

### 1. キリストを何よりも愛すること 26節

まず一つ目のポイントは、「キリストを何よりも愛すること」です。イエス・キリストの弟子として歩むには、ほかのどんなものよりもイエス様を心から愛して生きていく、ということが求められているということです。26節でイエス様はこのように言われていました。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」イエス様は、はっきりと人々に言われていました。「自分の父を、母や妻や子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちをもし憎まないなら、そのような者はわたしの弟子にはなれません。」と。いったいこのことばは何を意味していたのでしょうか。果たしてここでイエス様は、イエス・キリストの弟子となるためには家族との関係を断ち切らないといけないと、愛する夫や妻や子どものことを心から憎まないといけないと、そんなことを言われていたのでしょうか？もちろんそのような意味でこのことばを言われていたわけではありません。少し考えてみてください。イエス様ご自身も別の箇所でもこのように言われていたのです。マタイ15：3-4を見ても「：3 …「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。：4 神は『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は死刑に処せられる』と言われたのです。」と。またイエス様は家族を尊敬すること、愛することだけではなく、それを超えて敵さえも愛するのだと教えておられたのです。ルカ6：27「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。」またイエス様だけではなく、聖書全体の教えを考えてみても、例えばエペソ5：25にはこのようにありました。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」と。ですから、このようにしていろいろな聖書箇所を見比べ、聖書の流れに従って読んでいくと、みことばはまちがいなく、私たちが家族や兄弟姉妹たちを愛することを求めています。そうだとすれば、ではこの箇所でもイエス様が「家族を憎まないといけない」と言われたときに、いったい何を言われていたのでしょうか？

ここでイエス様が言われていたことは、もし私たちがキリストの弟子として歩むなら、私たちは自分たちがこの世で愛するどんな人やものよりも、それ以上に何よりもイエス様を愛さなければならない、ということです。この点を聖書はわかりやすく教えてくれています。これと同じことをイエス様は別の箇所でも言われていたのですが、マタイ10：37にはこの点がわかりやすく描かれています。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」何が言われていましたか？「よりも」と言われていました。ここで言われているように、聖書は、片方を愛して片方を憎みなさい、とは教えていませんでした。言われていたことは、キリストに対する愛とほかのものを比べるときに、私たちはどんなものよりもキリストに対する愛が一番でなくてはならない、ということです。私たちが大切にしている関係、それは皆さんにとって両親との関係かもしれません。夫や妻との関係かもしれないし、家族だけではなくて、兄弟姉妹や、たとえ自分自身のいのちと比べたとしても、キリストを愛することが一番でなくてはならな

いということです。そのことが求められていました。キリストの弟子はどんなものを犠牲にしたとしても、心からキリストを愛するということが欠かせないのです。

そのことを覚えてうえで、もう一度この時の場面・背景を思い出してみてください。群衆がイエス様の後をついて来ていました。イエス様に関心を抱いていたのです。イエス様に興味を持っていた者たちもいたでしょう。好意的な者たちもいたでしょう。私は救われていると思っていた者たちもいたでしょう。みなそれぞれにいろんな思いや考えを持ちながら、群衆の一部として歩んでいました。この方と一緒にいれば今自分が持っているものに加えて、何かすばらしいものが手に入るんじゃないかと思っていた者たちもいたでしょう。でもそんな群衆に対してイエス様は振り返ってはっきりと言われたのです。

「あなたのすべて、たとえあなたが愛している家族やいのちでさえわたしのために捨てることになっても、わたしを何よりも愛さないのなら、わたしの弟子になることはできません。」と。いったいどれだけの人がこのことばを聞いて、あまりにも厳しいと思ったでしょう。でも皆さん、それがイエス様の求めておられた、弟子としての歩みでした。

そして、これは今も変わっていません。もし、キリストを何よりも愛して、この主のためならそれ以外のすべてをささげる、という態度がないのであれば、そんなあなたはキリストの弟子にはふさわしい者ではない、ということです。だからこそ、立ち止まって自分自身のこととしてよく考えてみてください。イエス様ははっきりとご自身の基準を設けておられました。私たちが納得できないとか、私たちが受け入れることができないとか、だからこそ何とか交渉してその基準を引き下げることができるようなものではありません。イエス様ご自身が、キリストの弟子として歩む者はだれであれ、家族や兄弟姉妹どんな人との関係であろうとも、私たちの持っているどんなものであろうとも、自分自身でさえも横に置いて、キリストを心から愛してこの方にすべてをささげて従っていくことを決心する必要を求めていたわけです。これが、一番初めに弟子たちに対して求めておられたことでした。これがスタート地点でした。勘違いして欲しくないのは、もちろん救いは最初から最後まで、ただ神様の恵みのみわざでしかありません。でも、そんな救いを私たちが心から信じ受け入れ、イエス様をほかのどんなものよりも愛するというその決心がないのであれば、キリストの弟子としての歩みはまだ始まっていない、ということです。「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」これがイエス様のことばでした。

そうだとすればどうでしょう？ 私たちは今、キリストの弟子として歩んでいるのでしょうか？ それとも、ただキリストについて行っているだけの群衆の一部でしょうか？ 「私はイエス様の弟子だ。」と口にしていながら、自分の思いや考え、自分自身をいつまでも愛し続けて、キリストのことばがはっきりと示されていたとしても、それをことごとく無視し続けてはいないのでしょうか？ もしそうなら、よく気をつけなければいけません。なぜなら、イエス様が言われていました。ルカ 6：46 「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」ヨハネ 14：15にもこう記されていました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と。戒めを守ることによって私たちが救われるものではありません。でも戒めを守ることは、私たちがイエス様に対して持っているその愛を証明するものになります。だからもし、逆らい続けているのであれば、問われる質問は「イエス様に対する愛をそもそも持っているのか？」ということです。どうでしょう？ 私たちの生き方は、私たちの告白と、私たちの信仰と一致したものでしょうか？ 果たして私たちは、キリストのためであればそれ以外のすべてを喜んでささげるといふ、そんな何にもまさる愛を今持って歩んでいるのでしょうか？

## 2. 自分の十字架を背負うこと 27節

二つ目のポイントは、「自分の十字架を背負うこと」です。キリストの弟子として歩むには、自分自身の十字架を背負って生きていくということが求められている、ということです。ルカ 14：27でも

はっきりと言われていました。「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」では、具体的に「自分の十字架を背負う」というのはどういうことを意味しているのでしょうか？これを聞いてもあまりピンとこないかもしれません。というのも、私たちは実際に十字架にかかっている人を見たこともありませんし、周りを見渡せば、服であったりネックレスであったり、いろんなところに私たちは十字架がデザインされたものを見るからです。ある意味、私たちの周りには十字架というものがあふれています。でもこの当時は、決してそうではありませんでした。まちがっても、だれも十字架を身に付けて道を歩こうとするような者はいませんでしたし、教会でさえ十字架を掲げてはいませんでした。「十字架」ということばを、ただ一言、口にすることでさえ忌み嫌われる、そういった存在だったのです。どうしてでしょう？それは十字架というものが、ただ単に残酷で、最も屈辱的な死の象徴でしかなかったからでした。その処刑方法はあまりにも残酷で、最低のものであったがゆえに、ローマ市民たちは法律によってこの十字架刑から守られていました。ローマの市民があまりに酷い犯罪を犯したとしても、ローマの法律がローマ市民に対する十字架刑を禁じていたのです。ですから、このような十字架刑は、社会の中で最も忌み嫌われている、最も蔑まれている奴隷や凶悪な犯罪者、ローマに敵対する裏切り者にのみ与えられるものでした。またこういった十字架刑は今でも、あらゆる死刑の方法の中で最も残酷なものであるとも考えられています。それは、今用いられている処刑方法と違って、この十字架刑では即死することがないからです。両手首、両足首を縛られ釘で打ち付けられた受刑者はそこに数日の間、死ぬまで放置されました。受刑者は時間が経つにつれて自分のからだを自分で支えられなくなり、呼吸困難に陥って死に至ったのです。ですから十字架というものを考えたときに、社会の中でも忌み嫌われているし、十字架そのものの苦しみというものがあまりにも酷いものだし、それに加えてもう一つ、十字架刑が持っていた苦しみはこれだけではなくて、当時、十字架刑を受ける受刑者は、自分が貼り付けられる十字架を背負って町の中を歩いて行きました。自分自身でそれを背負って死刑場まで歩いていかなければいけなかったのです。当然、町の人たちはその様子を見に通りに出て来ました。その者を見て嘲笑したり、けなしたりしていたのです。十字架刑…それは、それ自体が最も酷い苦痛を伴うものであるだけでなく、その人物が犯した罪が公にされ、大きなはずかしめを与えるという目的で用いられていました。だから当時の人々にとっては「十字架」というものを、口にもしたくなかったのです。「十字架を背負う」ということは生半可なものではなかったのです。この背景を覚えて、イエス様のことばを耳にしたその群衆の姿を思い浮かべてみてください。イエス様が自分たちの方を振り向いて言われました。「自分の十字架を負ってわたしについて来ないのなら、わたしの弟子になることはできません。」そう言われたとき、まちがいがなく笑みを浮かべたような者はひとりもいなかったでしょう。

「自分の十字架を背負う」というのは、キリストのゆえに受けるさまざまな苦しみや大きな恥というものをすべて受け入れて従っていくということを意味していました。イエス様に従っていくことに伴うすべての苦痛やはずかしめを受け入れることを意味していたのです。多くの人たちがあまりのその厳しいことばに心打たれたでしょう。でももう少しだけ27節を見てください。自分の十字架を負って従うということに関して、少なくとも三つの重要なことばがここに挙げられていました。

### ●十字架を背負って従うこと：三つのことば

#### 1) 「自分の」：従うとは個人的なもの

27節はこんなことばで始まっていますね。「自分の十字架」と。一つ目は、この「自分の」ということばです。イエス様はほかのだれでもなく、「自分の十字架を負って」と言われていました。要するにこれは、キリストに従うということが個人の選択であることを表していました。従うというのは個人的なものだということです。だれかに言われたからではありません。家族や友人と一緒にそれを選択するも

のでもありません。私たちひとりひとりがそれぞれ主に従っていくというのを決心しなければならぬというわけです。

## 2) 「ついて来ない者」：従うとは継続的なもの

また二つ目に、続きのところを見ていくところも書いていました。「わたしについて来ない者は」と。ここにある「ついて来ない」ということばですが、ここに使われている「ついて来ない」という動詞には、もともと継続を現す現在形が用いられていました。「それがよくわからない」と言う人たちがいるなら、同じルカ9：23を見れば、ここで言われている内容を分かりやすく見て取ることができます。イエス様は同じようなことを口にされていました。こう書いていますね。「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」」「日々」と書いていました。要するにこれは、キリストに従うということが継続的なものであることを表しているのです。「従う」というのは継続的なものでした。自分の十字架を負ってイエス様に従っていくというのは、一回きりのことではないということです。日曜日に教会にいる時だけは従いましょう。それ以外の時は時々従いましょう…ではありません。日々、良い時もとえ悪い時も、どこにしようとも自分の十字架を背負ってキリストについて行こうとするのです。自分の十字架を背負うということに、休憩というものはありません。日々それを継続的になすものでした。

## 3) 「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は」：従うとは無条件なもの

そして最後三つ目は、イエス様がここで「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は」と、それだけ口にされていたということです。27節読んで気づきました？イエス様はここで、「この部分はあなたの十字架を負って従って来なさい。この部分は妥協してもいいですよ。」などということは全く言われていませんでした。イエス様はただ「自分の十字架を負ってわたしについて来なさい。」と命じておられたのです。要するにこれは、キリストに従うということが無条件のものであることを表していました。言い換えると、ここまではできるがこれ以上は難しいと、私たちの限界を設定できるものではないということです。その歩みがいかに困難なものであろうと、痛みや犠牲を伴うものであろうと、どんなときも無条件に従っていくということが求められていたのです。そしてこれは当時の人だけでなく、今の私たちにとっても同じでした。キリストの弟子として歩んで行こうとするときに、みことばに忠実であろうとするときに、どんな難しさに直面するのか、どんな犠牲を伴うことになるのか私たちに詳細はわかりません。ただわかっているのは、私たちがキリストに忠実に生きていこうとすればするほど、私たちは必ずさまざまな困難に直面するようになるということです。Ⅱテモテ3：12にも「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と書いていました。キリスト・イエスにあって敬虔に生きていこうと願って歩もうとすれば、一部が迫害を受けます」とは言われていませんでした。「みな例外なく、すべて迫害を受けます」と。それが約束されているのです。でも、たとえそれがどんなものであろうとも、あらゆる苦しみや恥を背負って、ただキリストのために従っていくということが、本当の弟子には求められていたのです。自分の十字架を日々負って、主についていくということ、それがキリストの弟子として歩む者には求められていたわけです。

そうだとすれば、私たちは今、キリストの弟子として歩んでいるのでしょうか？それとも、キリストにただついていっているだけの群衆の一部でしょうか？キリストに忠実に従おうとするときに、自分自身の思いや自分自身の望むことをしたいという、そんな欲や罪との戦いを必ず経験します。その戦いは日々あるのです。でも、その中であってなお、私たちは自分自身に対して日々死んで、ますますキリストを愛する者へと変えられていくことを願っているのでしょうか？そのような者に変えられたいと望んで歩み続けているのでしょうか？この当時、十字架を背負うことにより、周りの人々が明らかにそれを見ることができました。では、私たちの周りにはいる人たちは、果たして私たちのことをどのように見ているのでしょうか？キリストのために喜んで十字架を背負ってすべてをささげたいと願って歩んでいる人

だ、と見ているのでしょうか？日々自分の十字架を背負って、たとえ苦しみに直面しようとも喜んでキリストのためにすべてをささげて従うというそんな愛を、果たして私たちは今この方に対して持っているのでしょうか？

### 3. 犠牲を伴うことを考えること 28-33節

そして最後三つ目のポイントは、「犠牲を伴うことを考えること」です。キリストの弟子として歩むには、犠牲というものが必ず伴うことをあらかじめ考えることが求められていました。ここまで、ご自身を何よりも愛して自分の十字架を負ってついて来るように、と群衆に求めておられたイエス様は、最後に弟子としての歩みに伴うその「費用」というものをあらかじめ考えるようにと、二つのたとえを用いて教えていました。もう一度みことばをよく見てください。

一つ目のたとえが28-30節にこのように続いていました。「:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。:29 基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった』と言うでしょう。」ここで言われていたことは非常にシンプルでした。もし、だれかが塔や何かしらの建物を建てようとするときに、完成させるのに必要な費用を一切考えずに建て始めて、途中で頓挫したら…どう思います？それはあまりにも愚かなことでした。当たり前ですが、どんなものでも最初に費用を計算するという必要性があるのです。それと同じように、キリストの弟子として歩んでいこうとするとき、私たちはひとりひとりそれに伴う「費用」というものをまず初めに考えなくてはならない、というわけです。その費用とは、私たちが抱いているさまざまな人生の計画かもしれません。その費用とは、私たちが望んでいる快適な生活かもしれません。キリストの弟子として歩んで行こうとするときに、思い描いていた計画は変わってしまって、快適で楽な生活はなくなるかもしれません。自分自身を含めてありとあらゆるものを犠牲にしなければいけないかもしれません。しかし、たとえどんな費用がかかったとしても、キリストの弟子は変わらずに主に信頼し、喜んで従っていこうとするのです。どんな場所であろうと、どんな時であろうと、どんな状況であっても、イエス様の弟子はすべてをささげて従順に歩んで行こうとするのです。「その費用を、まず初めに考えなさい。」それがイエス様の教えておられたことでした。

またそれに加えて、二つ目のたとえが31-32節に記されていました。「:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。:32 もし見込みがなければ、敵はまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。」ここで言われていたことも、先と同じでした。イエス様は人々に、まず初めにしっかりと考えることを求めておられるのです。どんな王様であろうとも二万人を引き連れてやって来る敵を前にして、一万人で迎え撃とうとすれば、大きな被害を受けることになるのはもう明白なことです。だからこそ、そうなる前によく座って考える必要がある、というのです。私たち自身もキリストに従っていくのに伴う「犠牲」というものをまず覚えなくてはならないのです。

そして最後に、イエス様は33節で「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」とはっきりとされていました。「だれでも自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」もちろんこれは自分自身が持っている財産のすべてを売り払わなければ、貧しくならなければキリストの弟子にはなれない、ということを行っているわけではありません。ここでイエス様が言わんとしたことは、キリストの弟子として歩む者は、自分が持っているものはすべて主がその所有者であるということを認めなければならない、ということです。キリストの弟子として歩む者は、自分が持っているものはどんなものであっても、すべて主がその所有者であると認めなくてはならないということです。私たちは何も自分のものとして持っていない、すべてがキリストのものであるのだと。言い換えると、自分のものでないものに心がとらわれて、キリストに

従うというその歩みを妨げられることがあってはならない、というわけです。覚えています？金持ちの青年がまさにそうでした。彼はイエス様のことばにすべて従うということよりも、自分の財産に心を奪われていたのです。キリストの弟子にとって、二人も主人はいません。ひとりしかいません。ただひとりイエス・キリストだけです。私たちが持っているものは、すべて。皆さん、すべて、家族も、時間も、私たちの財産も、私たちのからだも、私たちの心も、私たちのいのちでさえも、私たちのものではない、ということです。私たちに今与えられているものはどんなものであったとしても、ただ恵み深いあわれみ深い主人である主から託されているものに過ぎないのです。私たち自身の所有物は何もありません。でも、キリストに従う者には、すべてにまさるイエス・キリストご自身が与えられているということです。それにまさる宝があるのでしょうか？確かにキリストの弟子として歩んでいくことには、多くの犠牲が伴います。だからイエス様は、その前にしっかりとその費用を考えるようにと教えておられました。

そうであるなら、改めて自分自身のこととして考えてみてください。私たちは今、キリストの弟子として歩んでいるのでしょうか？それとも、ただキリストに関心を抱いているだけ、自分の生き方をやめずに、自分のやりたいことをしながら、ただキリストについて行っているだけの群衆の一部ではないのでしょうか？イエス様は明白に教えておられました。キリストの弟子として歩むことには大きな犠牲が伴うと。果たして、あなたはキリストを何よりも愛して、自分の十字架を負って喜んで犠牲を払う、そのような弟子として今を歩んでいるのでしょうか？

ある人は今、このあまりにも厳しい基準に驚いているかもしれません。払わなければならない犠牲の大きさに圧倒されているかもしれません。でも、もしそうであるなら、いま一度イエス・キリストの姿を思い出すことです。私たちが、自分たちが払わなくてはならない犠牲に、費用に心がとらわれているのであれば、この方がもうすでに払ってくださったその犠牲の大きさというものを思い出すことです。改めて考えてみてください。私たちの主はいったいどんなお方なのでしょう？ヨハネやパウロはこのように宣べていました。ヨハネ 1 : 1 「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」私たちが学んできたコロサイ 1 : 15 - 16 にも「:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。…」はつきりと教えられていました。イエス様こそが永遠の神様なのだ、この方こそ世界のすべてを造られた創造主、偉大な力を持っておられる主権者なのだ。でも同時に、この方は完全な神様であっただけでなく、完全な人としてこの世に来られたお方でもありました。ヨハネ 1 : 14 にこう書いていました。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」ピリピ 2 : 6 - 7 にも「:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。」と。いったいどうしてこんなにも偉大な神様であるそのお方が、人として地上に来られたのでしょうか？それは、ほかのだれでもない私たちを、罪とその罪がもたらす滅びから救い出すためでした。ヨハネは言っていたのです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と。そもそも、そのような愛に与る資格が私たちにあったのではありません。私たちはみな神様の栄光を現すという目的のために造られたにもかかわらず、生まれながらにその目的に逆らい続けていました。ここに居るだれひとりとして神様の前に愛されるような、この愛を受ける資格を持っている者はいなかったのです。むしろ私たちは、聖なる神様に逆らい続けるその罪のゆえに、正しく罰せられ、永遠に滅んでしかるべき存在でした。それが私たちだったのです。でもそんな私たちに、神様が愛を示してくださいました。みことばはこう宣べていました。I ヨハネ 4 : 8 - 10 「:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私た



ちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と。こうして神の御子であるイエス・キリストは、愛のゆえに十字架にかかって死んでくださいました。本来であれば、罪の一切ない神の子羊が、最悪の、社会からも忌み嫌われているような十字架にかかる必要など到底なかったのです。どうして主の主であり王の王であるその方が、人のために十字架にかかる必要があったのでしょうか？どうして創造主であるそのお方が、被造物である罪人のために代わりにはずかしめを受ける必要があったのでしょうか？どうしてどんなときも聖く正しいそのお方が、みずから背き続け、逆らい続けている者のためにその血を流す必要があったのでしょうか？でも、それでもなお、イエス様はみずから進んで十字架にかかってくださいました。私たちの代わりに罰を受けてくださったのです。皆さん、私たちはその測り知ることのできない犠牲のゆえに、罪を赦されました。私たちが想像することもできない犠牲というもののゆえに、私たちは、信仰によって恵みによって救いが与えられたのです。それを成し遂げてくださったのがイエス・キリストでした。それが、聖書が私たちに教えてくれているイエス・キリストの姿でした。

そうだとするなら、あなたはこのキリストの弟子として、今歩いていこうとしているのでしょうか？確かに自分を捨ててキリストを何よりも愛するということには困難が伴うかもしれません。でも、キリストは、ほかのだれでもないあなたのためにご自分のいのちを捨てて死んでくださることによって、愛を示してくださいました。確かに自分の十字架を日々負って歩いていくことには難しさが伴うでしょう。でも、キリストはご自身には全く罪がなかったにもかかわらず、あなたのために十字架を背負い、罪の代価を代わりに支払ってくださいました。確かに自分のすべてを捨ててキリストにすべてをゆだねて歩いていくということには不安や恐れが伴うかもしれません。でも、キリストは栄光に満ちた神様であるがゆえに、ほかのだれにもできなかった死の力を打ち破って今もなお生きておられるのです。そんな勝利者であるお方が、きょうもあなたとともにいてその歩みを助けてくださると約束してくださっているのです。確かにこの世はキリストのためにすべてをささげて生きていくということは愚かだと、そう一蹴するかもしれません。でも、キリストが成し遂げてくださったことを覚えるときに、私たちは喜んで自分をささげていきたい、とはならないでしょうか？ほかのすべてを失ったとしてもこのイエス・キリストを手にするということが何にもまさる宝だ、とは思わないでしょうか？

この偉大なイエス・キリストに対するあなたの応答は、いったい何でしょう？自分自身をいつまでも捨てずに、これまでと同じように自分勝手な生活を続けるという選択でしょうか？滅びへと向かい続けるという選択をするのでしょうか？それとも、このイエス・キリストを心から救い主として主として信じ、すべてをゆだねて、この主だけを心から愛し、主にどんなときも信頼して喜んで犠牲を払う、そんなキリストの本当の弟子としての歩みでしょうか？言えることは、ここには中途半端な選択はないということです。皆さんはどちらかです。自分のために生きているのか、それともキリストのために生きているのかのどちらかです。その選択を、それぞれがしないといけません。イエス様は、このことばをかけた群衆に「あと五日待って五日間考えたら来て、答えを教えてください。」などとは言われていませんでした。群衆に対して今、その決断をすることを求めておられたのです。私たちも同じです。もしその決断をしていないのであれば、今それをするのです。私たちに明日があるかないかはだれにもわかりません。このイエス・キリストを自分の主として、救い主と信じ受け入れて、この方のために生きてください。そして皆さん、どうか覚えていてください。キリストの弟子として歩むその生き方には、試練も犠牲も伴います。数多くの苦しみも伴います。この世において、確かに多くのものを失います。それでもなお、揺るぐことのない喜びを私たちはいつも持って生きていくことができます。どうしてか？それは私たちが失うもの以上に、最高のものをすでに手にしているからです。罪に死んでいたそんな私たちを救い出してくださいました主イエス・キリストをあなたは持っているのです。何があろうとこの世にあって私たちは主とともに歩いていくことができます。そしてそれだけではなく、この主にお会いして

永遠とともに過ごすという希望をも持っているのです。スティーブ・ローソンという先生もこのように口にしていました。「イエス・キリストに従うことは、人生における最大の冒険です。それには人生最大の目的、キリストだけに属する栄光を追い求めることが伴います。人生最大の必要、イエスだけが与えることのできる罪の赦しにも出会います。人生最大の喜び、キリストを知ることを通してのみ得られる喜びをも与えてくれます。人生最大の関係、イエスと密接に歩むという交わりをも含まれます。人生最大の教え、キリストだけが持つておられる知恵をも与えてくれますし、人生最大の力、勝利に生きるためのイエス・キリストの恵みをも注いでくれます。それはこの世での人生の後の最大の目的地、すなわち天におけるイエスご自身の臨在へとも導くものであるのです。」私たちは、このイエス・キリストとともに歩み続けていくことができます。イエス・キリストに従うということは、キリストの弟子として歩いていくというのは、最大で最高の道のりを主とともに歩いていくということです。そこには犠牲は伴います。でも、だれがともにいるのかを覚えることです。この主を何よりも愛して、自分の十字架を負って、キリストの弟子として歩み続けていきましょう。もし圧倒されることがあるなら、測り知れないその愛を、その犠牲を払ってくださった方を思い出し続けることです。その方をいつも覚え、その方の助けを祈り求めながら、その方を愛する愛のゆえに喜んですべてを犠牲にして、ともに歩み続けていきましょう。